

書評

中村 純 編案, 野村総一郎, 中村 純, 青木省三, 朝田 隆,
水野雅文 シリーズ編集

《精神科臨床エキスパート》

抗精神病薬完全マスター

神庭重信

新規の抗精神病薬が出そろった観がある。通称として、第2世代とも非定型とも呼ばれるこれらの薬剤は、従来の抗精神病薬と比べて、パーキンソン症候群、ジストニア、遅発性ジスキネジアが出にくいことは確かである。これは、統合失調症の治療が、チーム医療となり、病院から地域へと広がり、患者さんの社会復帰を実現させていく上で、極めて好都合なことであつたと思う。

しかしながら一方で、東アジア6か国における統合失調症患者の処方調査(2001年7月時点)によれば、向精神薬数、抗精神病薬の処方量ともに、日本が断トツ1位である。多剤・大量療法の問題がマスメディアによる辛辣な糾弾を受け、厚生労働省から「向精神薬等の処方せん確認の徹底等について」と題された課長通知(2010年9月)が出されるに至っている。平成25年度から始まる地域医療計画で実施される医療連携の中でも、抗精神病薬の単剤化率が病院機能を測る指標として言及されている。すでに睡眠薬の併用数が3剤を越えると診療報酬が減額されることが決まったと聞く。このような“外圧”を受けて医療を変えざるを得ない状況に至ったことは、精神医学に身を置くものとして、不名誉なことである。

昨今、精神療法の習得が精神科研修の中で重要視されているが、同様に臨床精神薬理学の基礎知識と技術の習得も、卒前、卒後の教育を通じて、さらに徹底される必要がある。いかに良

い薬が誕生し、治療ガイドラインが作られてきても、治療が技であることは昔も今も変わらない。薬物を知り尽くし、自家薬籠中の薬とし、しかも服薬の心理を理解し、アドヒアランスを維持することは並大抵の技量ではないと思う。

本書は、基礎から最新の応用にわたり実践的な情報からなり、新規抗精神病薬を適正かつ縦横に使いこなすための格好の資料ともなっている。新規抗精神病薬を薬剤ごとに取り上げて、その特徴をつぶさに紹介した箇所が三分の一を占めている。これは類書にない内容であり、臨床精神薬理学を専門として治療経験を豊富に持っている中村純教授ならではの編集であろう。薬剤の添付文書から重要な記述が転載されており、薬剤ごとに知っておかなければならない注意事項を喚起してくれる。新規抗精神病薬には気分の安定化作用も認められているが、これらの効果についても説明されており、「完全マスター」というタイトルにふさわしい内容を備えている。

新規抗精神病薬は、さまざまな状態に応用されるスタンダードな薬剤となっている。幅広い層の臨床医が読んで、得るところの大きい一冊である。

(九州大学大学院・精神病態医学教授)

●B5 240 頁 2012 定価 6,090 円(本体
5,800 円+税 5%) 医学書院刊